

雜 錄

雨の幼稚園

愛らしい遊びのかす

打ち續く五月雨の鬱陶しさにさらされても活動性の溢る、ばかりな幼見は大好の砂遊びも出来ず如何にして其日を暮す事であらう、昨日蕭々と降る細雨の中を江戸掘幼稚園に行つて見た、折しも遊戯室では五つ六つの幼児が男女打ち交つて盲目遊びの真最中、先づ三十人ばかりの幼児が大きな輪を作つた中に愛らしいエプロン掛けたおみよちやんと紺ガサリの太郎さんが目をかく縛られて傾りに追つかげたり逃げたりしてゐる、おみよちやんが、鬼さんこいよと手をた、げば太郎さんは其聲をなせるべに追つかける、併し互ひに目が見えないのでそれになつても捕へなかつたりするので輪になつてゐる見物人はをかし、と手をたいて笑ふ其賑々しさ無邪氣さ譬へやうがない、遂におみよちやんが纏まつたので又ドツと笑つた、それが濟むと今度は其まゝ鬼だけ變つて「茶坊主」をした茶坊主は輪の中の子供が矢張り目を縛られて居るがお盆に茶碗を載せたのを持つて自分の思つた處へ持つて行つて、勝次さん、近藤さんなど、名を指して置く、指された子が今度は鬼になるといふのであるが目無しなのでお盆の茶碗を落すまいと注意する、手つき足つき危なかつか、折角指して行つた名が違つたりするので紅葉の思ふやうな手をたいて皆が笑ふ、幼稚園に居ると雨のいぶせさを思ふ處ではなく先生方も見て居る記者でも眞實に心から笑つて仕舞ふ、やがて此頃同園で新しく作つた「拍子行進」といふのをしながら各自教室に入つたが此拍子行進といふのはオルガンのマーチの曲に合せて手を振り足踏た、しく幼児の行進中飾に立つて居る先生が一つ手をた、くと子供は一時にく

るりと後ろを向いても来た方へ進むといふのであつた。是は餘程注意方の強い子でないとうっかりしてゐるでせう」と記者がいふと先生は「大人には一寸さう思はれますが子供はかういふ遊戯中にも變化のあるものを喜びまして手の鳴るのを待つて居ります」と語つた、何にしても愛らしいものである

双葉幼稚園の午後

毎日一錢宛持つて来る  
先生帯を締めて頂戴

○双葉幼稚園の現況 四谷鮫ヶ橋の双葉幼稚園は去る明治三十九年學習院女學部附屬幼稚園主任野口幽香子女士が同地附近に在る貧民の子女を教導する趣旨により江湖の義捐と同情者の盡力とを得て創立したるものにして爾來星霜を経ること五年目下は定員百二十名を超ゆること十名即ち百三十名の子女(内男兒七十餘名、女兒五十餘名)を五組に分ちて教育し居れるが總て世間何れの幼稚園にもその授業時間は午前より午後一二時に亘る僅か二三時間に過ぎざるが常なれど元來此園は其日の生計に追はれて餘事を顧る暇なき人の子に一分一秒にても多く良き感化を興へんとする目的もて起りたるものなれば午前八時より午後五時まで殆ど終日兒女の師となり母となり或は遊び相手となり居る疎母の勞の多大なること此一事のみにても並大抵の事ならずして特志の者ならば到底出来得べからざる處なり況んや家庭の教へ全く無く生ふるが儘に任せたり若草を直きに導かんや困難は一連りの事にはあらざるべし園長野口女士は一週一二回來園して全般の事務を總覽し種々の注意を興へつゝあるが平生は渡邊すゞ子百島増千代子鈴木とく子徳永ゆき子近藤すみ子多々良てい子の六女史専ら之に従事し内、百島鈴木徳永の三女史は此處に住居して總ての監督



生これで宜いのレ、かこしこより聲起りて忽ち先生を包圍せる子等は身體も衣服も垢に汚れて異様の臭氣を衝く、之を一々懇ろに世話する先生の苦勞は察するに餘りあり世の穢羅に身を包める人々にせめてその餘財を抛つて斯る事業に盡力せる人の特志を扶くるこそその本分なるべけれなど思ふ

▲入浴と辨當 最初周圍は朝六時より開門したるも室内の器物往々紛失することあるより已むなく七時よりとし、それにてもなほ警戒に困難なるより近頃は八時開門と云ふことに改めたるなりとか、而して入園申込みは非常に澤山なるも經費の都合にて前號記載の員數に止め置くなりと云ふ又毎週二回園兒の母親三人を履き入れて子女を入浴せしめ居りしも昨今は之れ又毎土曜日改めたりとこれに付き鈴木女史は語るやう「貧民黨として不思議なことに入浴を度々することです、それ故折角湯を立て、入浴させて遣らうと待ち構へて居ります」と宅の子供は昨日入れましたから、何うか今日は御免を蒙ります」と申すものが多いので一週に一度と云ふことにしたのでございます、それからお辨當の副食物が毎日變つて居りますこれも貧民には不似合ですが、一體餃子と申す處は一旦此處まで身を落せば大へんに何か御座くて暮し好い處ださうで、従て食物などは私共が考へて居るやうなものではないのであらうと思ひます、昨日までと園長も見えて居りましたから、何か御話も申上げられたでせうが、私は至つて不行届で只年後に斯うして御應接申上げて居るのみのことです、折角の御尋ねに有益な御話も出来ませぬ併しどうか御目に餘つた處は充分に御批評を願ひますと云々、談は盡きれどさのみ長くはと今年卒業したる園兒の製作せる粘土細工一つを借り受けて辭し去らんとすれば、小さき子供等は、先生左様なら、左様ならと莞爾しつゝ、そつと衣の袂を引きなして(完)

●大坂四六 尙武祭

幼兒の遊びに何かなとの工夫足りない西區の西六幼稚園では舊曆重五の前日に當る昨日十日の午前中を以て菖蒲の節句遊びを催した、ヤ、御節句じや、嬉しい嬉しいと特に許された御菓子袋を腰にブラ提げて端午の唱歌を歌ひながら「母さんも、父さんも」と無理無禮に念かして立てて例よりも早く幼稚園へ来て見ると芝罫の應接間には鎧武者の額が掛つて柱には菖蒲の活花、何の保育室も何の保育室も塗板蓋には白紫の菖蒲ばけ、廣間に並べた「作り歯」と轆轤やら兜やら武者轆轤の類を撰んだ先生の心配りに幼兒はいよゝ大喜び、お庭の先の休養室に美しう飾り立てた騎馬人形や鎧武者や熊を押へた金時や加藤の蛇の目の旗さしもの御殿作りの武者人形から當世ぶりの軍人など新古數十の人物欄をケルリと圓んで押合舞合の品さだめに時を移してから大遊戯室の英蕨敷へ二百餘のお膝を並べたの九時十分過ぎであつた、紫の引幕がスルスルと開いて君が代の歌が清んで愛らしい源平行進が平舞臺を下りて仕舞ふと次か「舌切雀」の可憐らしい獨唱、幕が閉つて幕が開くと顔を包んだ熊の上に斧を擔いだ金太郎の活人藪が笑ふて居るので大笑ひ、今度は評判の大相撲で「ヨ」と先生の口上があつて紅白の綱で圓ふた土俵の真中へ手拭の杜つけた豆のやうな行司が現れた、手には小さな澤瀉團扇、それで煽ぐやうに「こつち、山田さん、こつち橋本さん」と兩だまりの力士を呼び出すと醫で一杯の兩力士が力みかへつてシヨ踏んで直ぐに組みついで一生懸命に秘術を盡す「モシ、行司さん、モット土俵を回つては聲かけなばれ、アイヤ、残つた、ソ、踏着的に立つて居ては勝負が見えまへんゾ、ハ……」と使丁の爺さん行司の後から走りまはる「オツト、あつた、東勝負、ソ、軍配を上げなさらんかナ、オー、ソー、ちや」と勝負は二番三番四番、とうとう東方へ御勢が渡りて大相撲が打出しになると中入で「御菓子おあ

がリ」といふ御許がある、そのうちに毒が開くと眞實のやうな虎退治の酒人節、彈き出す風琴の音につれて「今日は五月の御霊句で、家根には高い麗のぼり、うちには飾る武者人形、餅形兜に鎧もつて、加藤清正虎退治」と満場一齊に歌ひ出した時の勇ましき可愛いらしさ、御仕舞ひの「綱引」には人形のやうな巴御前や板額どもの打らまらつての大働きに後の席の父さん母さん婆さん達も我を忘れて拍手喝采、手に／＼粽と柏餅を買ふて尙武祭の終つたのは十二時前であつた。

### ●愛らしい陳列

安土町の船場幼稚園では昨日新築の保育室に兒童の作品を陳べて父兄達の縦覧に供した。遊戯場は小砂利を敷きつめて芝山の陰に大きな金網の小鳥籠がある。芝山も兒童が轉んだり上つたり出来るやうになつて、新しい藤の棚の下の鞆籠は大繁盛、成るべく山も樂に上れる様にして屬ふに運動させたいのが目的でございます」と八田保壽は云ふ。折紙の電車があつて恩物で梅田スノーシューン、築港、天王寺大隈城が作らへてある。築港行き、四ノ橋乗り換へ杯と子供が云つて喜んでゐる。こゝに汽車、人力車、電車、何れが早いかに就ての兒童の答へが出てゐる。電車は針線とコマが澤山あるから、汽車は車に油をつけるから、電車は針線とコマがあるから、電車は車掌が機械を早くまはすから、汽車は笛をならすから早いといふ様な邪氣の無い答へがあるかと思ふと、知らん、なんでもかといふ様なもの澤山ある、海」といふ間に女の兒は波と、んぶ沙水、はい、はい、つぎと鯛、男の兒は、海は築港で車籠と蒸気船がある、杯答へてゐる、中には海は瀧があつて鯛と鯛がありまふと答へたのもある。葉、蝶や舟の形にして貼つたのも面白く好きな玩具の持ち寄りでは人形と汽車と電車が多くの階上の同本室には同校裁縫生の手になつた生花、盆石の陳列、茶室

には女生徒のお手前があつた。

### ●貯金の心掛

金森通倫氏が九州邊で貯金演説をした時に三度のものは二度喰べるやうにして働らげと云つたとてそんな馬鹿氣たとかあるものか我々は三度のものを四度にもして大に働ちく積りだと非常に反對があつたさうです、其儘まで云ふては素より餘り極端に過ぎるに相違ありませんが經濟の原則として貯金は是非とも収入の内から放出するの外はありません世間並とか附合ひ上と云ふは奥さん方の口實になつて居りますが世間並みとも別に極つた並みがあるでもなく附合ひとて何でも之れだけの事をせなければならぬものと極つたものでもありません實は此様な事を云ふ奥さん方は世間並以上の衣食、身分以上の附合ひ及び不取締から生ずる無駄遣ひか澤山ある其れで會計が苦しいのです、第一に自分の家の収入を考へて見て衣食住に申すに及ばず交際費でも細費でも此以上は出せぬと思へば其れで何とが始末を附けるやうにせなくてはならぬ、乃ち凡ての事を一段卑く少し控へ目にさへしてそして無駄遣に充た氣を附くれば餘程會計は樂に往けるのです、其様申すと奥さん方には悪いやうですが内のみ居る人はお金を取る方の苦心に就ては比較的同情がない爲め彼の着物も此の化粧品もと云ふ然も出るのですが御主人の氣になつて御覽になると今日の生存競争は中々大した骨折なんですから少しでも貯金をして不時の準備位は是非とも奥さんの手でできるやうな心懸けが肝腎だと思ひます。